

タヌキの遺体から考える

たる はじめ
樽 創 (学芸員)

博物館では、動物の骨格標本を収集するために、遺体となった動物の解剖を行っています。このような作業を行っていると、ときに骨格以外に得られるものがあります。その一部をちょっと紹介しましょう。

小田原市沼代で2008年1月6日に回収された、タヌキの遺体の解剖を行いました。解剖に入る前に、体表を調べたところ、体毛にいくつかの草の実がついていました。服によくつくような草の実は、当然ですが、本来動物の体毛に絡まるようにできています。

早速、植物担当の勝山学芸員に同定してもらったところ、それぞれチヂミザサ、ヒナタイノコヅチ、コセンダングサ、オヤブジラミの実(図1)であることがわかりました。このような、実に突起や引っかかりがある植物の拡散方法は、動物の体毛について運ばれると容易に想像できますが、実際に野生動物から採取できるものとちょっと感慨深いものがあります。

ところで、実が動物の体につくことはわかりますが、動物の体からはどのようにとれるのでしょうか。勝山学芸員に実の同定をお願いした際に話題になったことがあります。今回確認された実のうち、タヌキが回収された1月6日では、実が体につくには時期がずれているものがある、ということでした。それはオヤブジラミで、オヤブジラミの実は初夏に実るため、年が明けた頃にはほとんど植物体から落ちてしまっただタヌキの体にはつく機会がないのではないかと、とのことでした。ではなぜタヌキの体についていたのでしょうか？また長い間実が植物体から落ちなかったのでしょうか？そして、これらの実はいつどのように体からとれるのでしょうか？

実際には、体に一度つくるととれやすい種



図1 タヌキの体についていた植物の実。左からチヂミザサ、ヒナタイノコヅチ、コセンダングサ、オヤブジラミ。右端のバーは1mm。

類と、とれにくい種類があります。今回タヌキについていた実では、とれやすいものとしてチヂミザサ、とれにくいものとしてオヤブジラミ、それらの中間的なものとしてヒナ

タイノコヅチ、コセンダングサを位置づけられると思います。実がとれる可能性としては、大きく2つあると思います。1つは毛繕い(けづくり)です。チヂミザサなどのとれやすい種類では、毛繕いでとれてしまうでしょう。一方、体毛の生え換わりによってとれることもあるでしょう。哺乳類(ほにゅうるい)は一般に、体毛が夏毛(なつげ)と冬毛(ふゆげ)に変わります。そのときには、オヤブジラミのようなとれにくい実もその場に落とされていくでしょう。長い間体についていれば、遠くに移動できる可能性もあるのではないのでしょうか。とれにくい実がこのような生活に適応していると仮定すると、初夏にできたオヤブジラミの実が、年を越えてタヌキの体毛についていたことも想像できます。

さて、動物の解剖では、その動物がどんなものを食べていたかを、胃の内容物から確認することがあります。このタヌキの胃内容物を調べたところ、ちょっと見慣れないものが見つかりました。三角形の、ちょっと金属質の光沢を持つものです。胃からは2つ出てきました。初めはプラスチック製のおもちゃのパーツかと思ったのですが、合わせてみるとぴったりと合って、三角錐(さんかくすい)になります。その

状態でよく観察すると、どうしても鳥の嘴(くちばし)に見えます。そこで、鳥類担当の加藤学芸員に、こんな嘴の鳥を見たことあるかと聞いたところ、彼女はしばらく考えていましたが、そういえば、と、ある鳥の剥製のところへ連れて行ってくれました。それはシメというスズメより一回りほど大きな鳥でした(図2)。嘴を比べ



図2 左：シメ(メス)。右：シメの嘴。左下がタヌキの胃内容物だった嘴、右上がシメの剥製の頭部。大きさ、金属光沢の様子がよく似ている。剥製は若い個体のため嘴がやや黄色い。

たところ、大きさや形がぴったりで、色はやや違いがあるものの、金属のような光沢を持つことなど、よく似ています。色の違いは、剥製が若い個体のために黄色味を持っているということで、インターネットで検索したところ、同じ色合いの嘴を持ったシメの写真をいくつも確認できました。これで、この嘴の主がシメだろう、ということがわかりました。

ところで、このシメはタヌキにどのような状況で食べられてしまったのでしょうか？加藤学芸員は、シメが休んでいるところをタヌキが襲った(おそ)ったのかもしれないし、何らかの理由で死亡したシメの遺体をタヌキが食べたのかもしれない、と可能性をいくつか示してくれました。

胃内容物にはこの他にもツチガエル？の頭の一部等が含まれており、このタヌキの栄養状態が、それほど悪くなかったことが推定されました。カエルは越冬していたものを掘り出したのでしょうか。

このように、動物の行動を直接観察できなくても、遺体から行動が垣間みられることがあります。

自然科学のつば

第14巻4号(通巻55号)

2008年12月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 斎藤靖二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 石浜佐栄子

印刷所 朝日オフセット印刷株式会社

© 2008 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

R100

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association